

JF スタンダード準拠上級講座における試み 学習者と構築するコース — 自律的学習を目指して —

渡部 淳子

ケルン日本文化会館

1. 実践の背景

ケルン日本文化会館（以下、会館）の日本語講座では初級から上級まで9段階のクラスが開設されているが、その全ての講座が2011年からJF日本語教育スタンダード（以下、JFスタンダード）準拠で実施されている。

現在初級5段階、続く初中級、そして中級1までの7段階では全て『まるごと 日本のことばと文化』（以下、『まるごと』）シリーズの教材を使用して授業が実施されているが、中級後半と上級の2つの段階のクラスでは『まるごと』以外の教材が使用されている。特に上級はすべて生教材でコースを進めている。本稿ではこの上級コースで行った実践について述べる。

1.1. 会館の上級コースについて

1.1.1 上級コースの概要と学習者に関する情報

上級コースの概要と学習者に関する情報は以下の通りである。

上級コースの概要

回数	週1回2時間（110分）、15回（1学期）（2014年夏コースまでは12回）
人数	8～9人
レベル	B1-B2
教材	生教材

学習者に関する情報

年齢	20代から70代（中心は30代後半から40代）
学習歴	会館で長年上級コース（進級なし）に参加している人が多い
学習目的	日本語能力の維持、日本語能力の幅を広げたい
ニーズ	現在の日本の状況、特にドイツで余り知られていない国内ニュースなどが知りたい
日本語能力	B1～C1
属性など	ほとんどが大学院日本関係学科卒業の社会人で、職業は様々であるが、仕事では日本語を使用していない。ほぼ全員が日本留学経験者。

1.1.2 上級コースの学習目標

会館における上級コースでの学習目標は以下のように定められている。

「生活、社会、文化などのさまざまなトピックについて、生の文章を読んだり、映像を見たり、ディスカッションしたり、レポートを書いたりすることができる。四技能をバランスよく練習しながら、日本語で高度なコミュニケーションができるようになることを目指す。」

2. 実践の動機と目的：何故このような試みを行ったか

長く日本語を学び中級以上の段階に到達した学習者が、更にさまざまな技能を向上させ、次のレベルに達するためには自分の能力を把握し、具体的な学習目標を立てることが欠かせない。学習者一人一人の目標をどうすればできるだけ効果的に授業の中に組み入れることができるのかを考えた。

今まではまず教師が JF スタンダードからトピックを選び、Can-do を設定し、シラバスを作成した。そしてそのシラバスに沿って教材を探し提供して授業を進めた。しかし教師から一方的に教材を提供するだけでなく、学習者にもっと自主的な参加を促したいと考えるようになった。そこで JF スタンダードを枠に学習者各自が自分の求める「何ができるか」を探し、教師と学習者が共にクラスを構築することを試みた。

3. 実践の内容

実践は大きく第一段階と第二段階に分かれる。第一段階は 2013 冬コースから 2014 夏コースまで、第二段階は 2014 冬コースに行った。以下、この段階別に実践の流れを説明する。

3.1. 第一段階（2013 冬コースから 2014 夏コースまで）

3.1.1 第一段階の流れ

まず JF スタンダード、『言語のためのヨーロッパ共通参照枠：学習、教育、評価 (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment)』（以下、CEFR）の中から多くの学習者が興味を持っていると思われるトピックを選び、それに対応して Can-do を設定し、シラバスの概容を作成した。一つのトピックは 2～3 回の授業で扱うようにして学期の計画を立て、参加者に仮予定表を提示した。

学期初めのオリエンテーションの時間に、この仮予定表を参考にしてクラスで扱ってほしいトピック、伸ばしたい技能、教師に期待することなど参加者の希望を聞いた。それに即してシラバスを一部変更したり補足したりして最終のコース予定表を完成した。この上級コースは会館の最終コースで進級がないため、学期末の評価方法には特に規定がなく担当者が各自決定している。ここでは参加者が学期中に扱うトピックの中から関連するテーマを一つ自由に選び、

課題発表をすることとした。この発表はクラス内で行うプレゼンテーションとし、その後の質疑応答も評価に含まれる。

この様に学期初めにまず話し合ってから、学習者の希望を反映させて授業を進めたことにより様々な変化が見られた。次に、その変化について述べる。

3.1.2 第一段階の成果

全般的に授業への参加態度が積極的になり、クラスの半分ほどの学習者がトピックで扱う内容についてもっと知りたいことを提言したり、関連するテーマなどを扱いたいと提案するようになった。初めは学習者から出てきた疑問や興味などを考慮して、教師が課題を考え振り分けたが、段々学習者が自分で興味ある分野に関して調べて話したいと表明するようになっていった。より自主的な授業参加が見られるようになった。

評価の対象になるプレゼンテーションは学習者が学期中に扱ったトピックの中から興味のある分野を選び、テーマを決定した。そしてネット等を利用して調べる等よく準備して行った。準備や内容、またプレゼンテーションでの工夫などからも意欲の高まりが感じられた。

3.2 第二段階（2014 冬コース）

3.2.1 第二段階の課題とその課題達成のための方策

第一段階の試みから2つの目標ともいうべき課題が見えてきた。第二段階では、それらの課題を達成することを目指した。

課題1 教師提供の枠を超えて、学習者の可能性をより広げる。

第一段階では学習者の希望をできるだけ反映しながら教師が生教材、主に音声を伴うニュースやニュース関連のテレビ番組、ドラマや映画の一部、それに関連した記事などの読み教材などを探し提供してきた。それだけにとどまらないで、学習者にもっと自主的な参加の機会を設けることができないだろうか。学習者の側から興味のある題材を自分で探し、クラスで発表して討論することができないだろうかと考えるようになった。

課題2 学習者が自分の能力を具体的に把握し、目標を設定する。自分で目標達成の方法を考える。

学習者は何のためにクラスに参加し、何をしたいのだろうか。その目標を漠然とではなく具体的に把握しているのだろうか。自分自身の能力の具体的な把握なしに、受身の状態からでは既にこのレベルに達した学習者が進歩するのは難しい。そのためにはコースで自己評価を行い、

何のために何が必要かを探り、目標設定をしなければならない。そして何をしたいかという具体的な活動目標を自分で定めることが必要であると考えた。

3.2.2. 課題1達成のための取り組み

学習者が参加して教師と共にクラスの枠組みを構築するために取った方法と試行錯誤を順を追って述べる。

3.2.2.1 トピックの検討と決定

課題1達成の第一歩としてコースで扱うトピックを学習者と一緒にオリエンテーションの時間に以下のような順序で検討して選択した。

1) JF スタンドアードの15のトピックとキーワード(表1参照)をクラスで検討し、それぞれが興味のあるトピックについて話し合った。

表1 JF スタンドアードの15のトピックとキーワード

	トピック	トピックのキーワード
1	自分と家族	自分や家族に関すること(家族構成、身体的特徴など)
2	住まいと住環境	住居や居住地域に関すること(部屋、家具、周辺施設など)
3	自由時間と娯楽	余暇や趣味に関すること(スポーツ、映画、音楽など)
4	生活と人生	日常生活やライフステージに関すること(日課、入学、結婚、子育てなど)
5	仕事と職業	仕事と職業に関すること(企業、職種、職務など)
6	旅行と交通	旅行と交通に関すること(旅程、公共交通機関、観光など)
7	健康	身体や健康に関すること(病気、通院、生活習慣など)
8	買い物	買い物に関すること(店、支払いなど)
9	食生活	食生活に関すること(飲食、レストラン、料理など)
10	自然と環境	自然や環境に関すること(天候、季節、環境問題など)
11	人との関係	人づきあいに関すること(交際、トラブル、マナーなど)
12	学校と教育	教育機関や教育に関すること(学校、学習環境、教材など)
13	言語と文化	言語や文化に関すること(外国語、冠婚葬祭、伝統文化、ポップカルチャー、異文化体験など)
14	社会	社会に関すること(政治、産業、経済、国際関係など)
15	科学技術	科学技術に関すること(最新テクノロジー、サイエンス、メディアなど)

2) 教師からトピックに関連したテーマの案を例として出す

まず全トピックにわたり現在の日本の状況やニュース等から取り上げる可能性があるテーマを選び、例として教師から提示した。特に上級レベルではもう関係がないと思われがちなトピックでも視点を変えれば現在の日本と関連があるテーマを探することができるということを示すような例も選んだ。以下表2にその一部を例示する。

表2 教師が提示したトピックとテーマ案 (一部)

トピック番号	トピック	テーマ案
1	自分と家族	「そして父になる」 (映画)
2	住まいと住環境	ついの住まい (NHK クローズアップ現代)
6	旅行と交通	ヒマラヤとアルピニズム、ISS 宇宙旅行 (ニュース)
8	買い物	フランチャイズ店、ショッピングモール (ニュース)
14	社会	子供の貧困 (NHK クローズアップ現代)

3) クラスでの意見交換の後で、15のトピックの中から各自が希望する5つを選ぶ。

教師は統計を取って、希望の多い順に授業で扱う7つのトピックを表3のように決定した。但し最初に扱うトピックは授業準備時間の関係から教師が今までで希望の多かったものの中から選んだ。この学期は「自然と環境」とし、テーマは自然災害、教材は「御嶽山噴火」に関するニュースや報道記事を選んだ。

表3 決定したトピック

1	自然と環境
2	自由時間と娯楽
3	社会
4	生活と人生
5	文化と言語
6	住まいと住環境
7	社会と職業

扱うトピックが決定したら、トピックごとに評価の対象となるプレゼンテーションの発表者を決めた。学習者はプレゼンテーションしたいと思うトピックを選び、クラス全体で話し合った。その後、全てのトピックに発表者を振り当てた。ここでも第一回目のトピックのみ、準備

時間の関係からプレゼンテーションは行わないこととした。学習者は決まった予定表に沿って、プレゼンテーションの準備をすることにした。一つのトピックで大体二人がプレゼンテーションを行った。

3.2.2.2 シラバスの作成と Can-do

コース開始時のオリエンテーションの時間までに、教師は JF スタンドの JFcan-do や CEFRCan-do の中からトピックに沿って大体の候補を上げておいた。トピックが決まり、学習者の目標もはっきりしたら、教師はトピックに沿って扱う Can-do を決定した。

3.2.2.3 授業例

以下に実際の授業例の流れに沿って見ていきたい。

既に述べたようにコース開始時に教師は学習者と共にトピックを選び、Can-do を設定して仮シラバスを作成している。授業はこのシラバスに沿って行われた。

例としてここで取り上げたのはトピック「社会」の授業 2 回分である。順を追って、その流れを述べる。

このトピックで設定した Can-do は表 4 の通りである。言い換えれば、①は、生の資料を読んで理解できること、②は、日本とドイツの実情を比較し自分の考えを表現したり批評したりできることである。

表 4 トピック「社会」の Can-do

トピック	Can-do
社会 1	①新聞や雑誌に掲載された自分の関心のある分野の批評を読んで、評者の独自の視点からの批評や見解を理解することができる。
社会 2	②題材となっている日本事情とドイツの歴史や現状について、自分の考えを表現したり批評をしたりすることができる。

次にトピック「社会」の教室活動例を具体的に挙げる。

表5 トピック「社会」の教室活動例

	トピック	教室活動	担当者（報告／資料提供者）
第1回目	自由時間と娯楽	担当学習者が前回のトピックについてのプレゼンテーションを行う。	学習者1（プレゼンテーション）
	社会1	「男女平等」（WEF 報告書 2014 から）社会問題のトピックに入り、日本における男女差の問題について、教師が提供する最新の資料を読んで状況を理解し、クラス全員で意見を述べ合う。	教師（資料提供）
第2回目	社会2	「男女平等」の続き。前週課題となった大学教育のドイツにおける男女差の歴史について希望者（学習者）が報告する。日本の状況に関しては教師が報告し、各自の考えを述べる。	学習者2（報告） 教師（報告）
		プレゼンテーション「サイバーモビング」 担当学習者が社会問題のトピックから日本の学校のサイバーモビングについて発表する。	学習者3（プレゼンテーション）
		クラス全体で、ドイツの学校の状況や、それぞれの経験を話し、問題点について議論する。	教師（議論のまとめ役）

予定では2回で1トピックを扱うことになっているが、ほとんどが社会人である学習者の都合等で実際には発表の順番を変更しなければならなくなることもある。この例では第1回目の始めに前回のトピックであった「自由時間と娯楽」のプレゼンテーションがずれ込んでしまっている。そのため「社会1回目」の最初は教師がちょうど公開された WEF 国際経済機構報告書「男女平等」の日本に関する部分を教材として取り上げた。まず報告書についての新聞記事を読んで理解し（Can-do①）、その点に関する日本とドイツの状況を比較してクラスで議論を行った（Can-do②）。この WEF 報告書についての記事は男女の就職状況に関してで、性差が問題として取り上げられていたが、学歴に関しての記述はなかった。クラスでの議論を受けて学習者の一人が、職業における男女差が起る要因の一つである女性の大学教育の歴史についてドイツの場合を調べて報告したいと申し出た。日本の場合に関しては教師が担当することに決め、これは次回2回目の課題の一つとなった。「社会2回目」では前回課題となった女性の大学教育の歴史を希望者と教師からそれぞれ報告した。

その次にトピック「社会」のテーマから「日本の学校でみられるサイバーモビング」についてプレゼンテーションがあり、その後クラスで日本とドイツの学校におけるサイバーモビング

を始めとした虐めの問題について比較を行った。この議論は教師がまとめ役としてかかわった。ここで特記したいのはクラスの活動の中で学習者から自発的に提案があり、報告が行われ、クラス全体で新たな課題に取り組んだことである。

3.2.2.4 教師の役割の再検討

学習者の自律学習を促すために教師に何ができるかと考え始めてから、具体的に授業を進める中で新たに教師の役割を探っていった。

学習者が自分たちで選んだトピックに関連するテーマを探し、それをまとめてプレゼンテーションで発表するという学習者主体の活動に対して、教師は何を提供することによって、学習者の知識欲に応え、興味を促し、授業に幅を持たせることができるだろうか。この問いを掲げながらの試行錯誤が続いた。

教師からの教材は今までどおり現在の日本で話題になっているニュース等に加え、学習者の発表内容にできるだけ関連したものを提供するように心がけた。その作業の流れは、まず学習者がプレゼンテーションの題や要旨を一週間前に教師に送る。その内容から教師はできるだけ関連した内容のものを授業で扱えるように探し準備した。例えば同じテーマで視点の違う素材、日本国内からだけでなく、ドイツなどで取り上げられた報道や記事等である。この作業は時間も掛かり、必ずしも適当なものが見つかるとは限らない。しかし学習者と教師双方から違った視点のものが提供されると、クラス活動に内容的な幅ができ、新たな興味や疑問が出されることも多く、議論も活発になった。プレゼンテーションの内容や教師から提供された関連教材について疑問点が出てきた場合には、希望者が調べて次の回に報告した。また学習者から教師に扱ってほしい内容についての希望がでたこともあり、教師が学習者の自律的な学習を補佐する方法の一つの可能性が見えてきた。

3.2.3 課題2達成のための取り組み ―ポートフォリオを利用して―

先に述べたようにこのレベルに達した学習者がさらなる能力の向上を図るためには、自己評価をし、具体的に自分の能力を把握することが欠かせない。そしてこの自己評価から自分に不足していると考えられる能力を具体的に知り、目指す目標を立て、その能力を得るためになすべきことを考える必要がある。この作業をまず学期初めにポートフォリオを使って試みた。チェックシートで行うような細かい点を見る自己評価ではなく、今までの学習経験を土台に学習者が日本語能力について自分に不足していると思うことを自省することとした。そしてそこから目指したいと思われる目標を掲げ、加えてその方法も模索してみた。次に学期中間点の振り返りでは目標の設定修正や方法の改善も含め、どんな変化があったかを考えた。最後に学期末には目標の達成度を自己評価してから、自分で考えた方法についても振り返り、加えて次への

課題も考えた。使用したポートフォリオの内容は以下の表6の通りである。なお、具体的なシートについては、巻末資料を参照のこと。

表6 ポートフォリオの内容

学期初め	自己評価を行う 目標を設定する 目標達成の方法を考える
学期中間点での振り返り	中間点での自己評価 目標や達成方法の修正
学期末のまとめ	目標達成度の自己評価 達成方法の評価 次への課題について考える

3.2.4 学習者の変化

課題1と2を少しでも達成するべく試行錯誤しながら3学期にわたり試みてきたが、その行程を共に体験した学習者の反応や変化をここで例を挙げて述べたい。

ここで見る二人の学習者は、ともに日本語能力はこのクラスでは中レベル、大学での専攻は日本学ではなく、会館における学習歴が長い。会館の講座で上級コースまで進んだ人の典型的な例といえると考えた。

学習者Aのプロフィール

年齢	30代前半
学習歴	会館で4年上級コースに参加している
学習目的	日本語能力、特に口頭能力を伸ばしたい
ニーズ	日本の文化や歴史などが知りたい
日本語能力	B1+
属性など	大学院卒業の社会人だが、現在大学で日本語教師養成学科にも通っている。仕事では日本語を使用していない。日本留学経験なし。

ポートフォリオ例（表記、表現等は学習者本人の記載のまま）

今学期の目標	「話す能力レベルを上げたい」 「語いを増やしたい」
不足している点	「話す、漢字と語い」
目標達成の方法	「発表をしたい」 「授業中メモして、たんごカードにかいて、うちでべんきょうしたい」

学習者の変化（報告者の観察）

授業での変化	評価対象となるプレゼンテーションだけでなく、自発的かつ積極的にクラス活動から派生した課題についての報告などにも取り組んだ。
プレゼンテーションでの変化	旅行等自分の経験について紹介するような発表から、興味をもっている分野、例えば自然や地理、魚と水槽の話などに話題が発展し、聞き手が関心を持つような内容になった。またプレゼンテーションもパワーポイントを上手に活用したり、クイズを入れるなどして他の学習者を引き込むような方法を使うようになった。

学習者Bのプロフィール

年齢	30代後半
学習歴	会館で7年上級コースに参加している
学習目的	日本語能力の維持、日本語能力の幅を広げたい
ニーズ	現在の日本の状況、特にドイツで余り知られていない国内ニュースなどが知りたい
日本語能力	B1+
属性など	大学院経済学部卒業で日本経済が専門の社会人。仕事では日本語を使用していない。日本留学経験あり。

ポートフォリオ例（表記、表現等は学習者本人の記載のまま）

今学期の目標	「ニュースの内容が大体分かる」 「語いを増やしたい」 「今日的なテーマについて聞きたいです」
不足している点	「語い、読む、話す」
目標達成の方法	「語彙を広がる。今日的な日本に起こることについて聞くと話すことは重要だと思います」

学習者の変化（報告者の観察）

授業での変化	日本語能力の向上のためというよりは、日本語に接して忘れないようにするために漠然とコースに参加していた。態度も消極的だったが、自分で目標を定めたことにより、自分の考えを進んで述べたり、疑問点などについて質問したりするようになった。考えていることが思うように表現できないというジレンマから少し開放され、授業への参加が明らかに積極的になった。
プレゼンテーションでの変化	それまでは身近なことを発表していたが、自分の趣味（ヨガ）について詳しく説明したり、それだけに留まらず、そこからの一般化（瞑想などのテーマに発展させる等）を試みたりした。また社会問題への関心（サイバーモビング）などを英語の資料等を参考に、日本語で表現する努力をして内容を充実させた。

以上見たように二人に共通して言えることは、自律学習を目指して試みた自主的な授業参加に積極的に加わり、それに伴い学習意欲が向上したばかりでなく、自分で掲げた目標にも一歩近づいた。それを楽しんでいる様子が顕著であった。このような変化はクラス全体に共通して見られた。

4. 参加者からのフィードバック

会館では学期の最後に講座全体で受講者に対する修了時アンケートを行っている。そのアンケートで学習者から、良かった点として、次のような意見、感想が出された。

「オリジナルの教材」 「最新のニュースが扱われ、それについて議論した」

「多くの種類のテーマ」 「発表と報告がたくさんできた」

「参加者が興味を持っているテーマが扱われた」 「テーマ決定に参加した」

このアンケートでは、良かった点、改良すべき点の二つの点についてたずねているが、今回改良すべき点についての記述はなかった。新しい試みだったため、まだ具体的な提案までではできなかったものと思われる。

5. まとめと今後の課題

学習者と教師がコースの枠組みを共に設定することで、学習者の中にコースの運営に参加しているという意識が生まれた。この意識からだと思われるが、クラス内での発言が増えたばかり

りでなく、授業参加の態度が変わってきた。現在日本で起っていることに関して、状況が良く理解できない点を質問したり、学習者が自分で見つけた報道等をクラスで紹介する等、積極的に参加するようになった。クラス内で日本語に接するのを楽しむ雰囲気も顕著になった。

また教師提供の教材や学習者のプレゼンテーションのテーマに、他の学習者が反応し、自分で発展課題を見つけて教師に依頼したり、自ら報告したりすることが増えた。その際自分が得意でないと思われる分野では、他の学習者に調べて報告することを提案することもあった。以前は活動から派生した新しい課題に対しては、教師から希望者を募ったり、割り当てたりしていた。学習者間で相互に提案しあうような態度は今までに見られないものであった。

またポートフォリオを利用して自己評価や目標設定等を行ったが、学習者各自の自省にとどまりクラスで充分話し合う時間が持てなかった。クラス内での話し合いや意見交換にもっと時間を掛けて、個人にとどまらないクラスで共有できる目標も定められないだろうか。上級クラスでは学習者の日本語学習歴が大きく異なる上、会館の最後のコースで進級がないため、長年継続する人が多い。そのため実力差は中級までのコースに比べ非常に大きい。目標を共有するのは簡単ではないが、クラスで話し合い、共に考えることにより共通した目標も持てるのではないかと思う。

その共通の目標達成のために、教師が提供する教材や教室活動の意図を Can-Do と結び付けてより明らかにすることが重要である。活動や練習等がどのように繋がっているのかをもっと示していく必要がある。練習などを何のためにしているのかという具体的な目的が学習者にもっとはつきりすれば、目標との関連が理解しやすくなる。与えられたからするのではなく、学習者が意識的に実行することが大切だと思われる。この意識付けの重要性を教師の側がもっと自覚して教室活動を遂行する必要を強く感じる。

そしてこれらの作業を繰り返し続け、修了時の振り返りや自己評価で学習者が立てた目標がどの程度達成されたのかを明確にしたい。学習者がコースに参加した経験を基にして、さらなる目標を立てられるようになってほしい。これらの一步一步は小さな歩みではあるが、継続することを通して徐々に自分達で立てた目標に向かって進んでいることを教師と学習者が共に実感できれば、自律学習の基盤は既にできていると言えるのではないだろうか。

資料：ポートフォリオ例

学期初め

JKI 日本語 OS 冬コース 2014・15	10月14日 (火)
もくひょう コースと目標	
もくひょう ① 今学期の目標は何ですか。(例1: フォーマルな場面での話す力を向上したい。例2: 日本のニュースの全体の内容が分かるようになりたい。例3: 政治や社会問題などのニュース記事がもっと読めるようになりたい。等)	
② 日本語能力で特にどんな力が不足していると思いますか。	
③ 必要な力をつけるために何をしたらいいと思いますか。	

学期中間点振り返り

JKI 日本語 OS 冬コース 2014・15	12月2日 (火)
こんがつき ちゅうかんでん まな ふ かえ 今学期の中間点です。学んだことについて振り返りましょう。	
もくひょう もくひょう ④ 今学期の目標は何でしたか。目標に少し近づけましたか。	
⑤ 特にどんなことができた・できるようになったと思いますか。	
⑥ したいと思っていたことができましたか。	

学期末

JKI 日本語 OS 冬コース 2014・15

2月3日 (火)

今学期も今日で終わりです。学^{まな}んだことについて振^ふり返^{かえ}りましょう。

⑦ 今学期の目^{もく}標^{ひょう}は何でしたか。目標に少し近づけましたか。

⑧ したかったことができましたか。例を書いてください。

⑨ これからどんな事がしたいと思っていますか。